

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				備考	コメント
9 モクサ 茂草 (松前町)	地区 川	モムチャ	mom-ca	小柴の流れ 流れる・小枝	この川が増水する時には、小柴が海岸へ流れ寄るため。	上原 山田	C	-
10 モコト 藻琴 (網走市)	地区 川	モコト	mokoto	小沼{?}	この辺は大沼が多く、この沼は最も小さかったためという。	永田	C	?
		ムクト	muk-to	尻 ^{フサ} の塞がっている沼 塞がる・沼	{ 25 年版 }			
	駅 山岳 湖		{ po-kor-to }		モコト即ちポ・コトから出たものである。 たぶん藻琴沼の南東岸にある、ごく小さな池シュブン・ウント(うぐい魚・いる・沼)に気がついて着想されたのであろう。mo(小さい、静かな)をポ(po 子ども)と同じように訳される知里博士独特の地名解をここに当てはめられたのであった。 { 29 年版 }	駅名 山田		-
		ポコト	{ po-kot-to }	子・持つ・沼				-
	モコロト *モコト	mokor-to mokotto	眠っている・沼	この沼は山に囲まれていて波が静かであるため。	知里	-		
11 モシリ 母子里 モシクナイ (幌加内町)	地区 川	モシリウンナイ *モシルンナイ	mosir-un-nay	島・がある・川 ----- 国・がある・沢 (部落のある沢)	川中島があったからの名らしいが、今はそんな島は見えない。 ----- {他に例のない形と思われ、また、村であればコタンkotanを用いるのが一般的だという。}	山田 幌加内 町史	B	- 山田解が一般的な解釈と思われる。 ?
12 モシリ 茂尻 (赤平市)	地区 駅	モシクオマナイ *モシケソマナイ	mosir-kes-oma-nay	島の下手にある川 島・の末端・にある・川	左記の上部をとったもの。 ここは空知川の中に長い島があって、それがモシリ(mosir 島)であった。空知川の南岸側には、その島のある所に、モシリ・パ・オマ・ナイ(島の・上手・にある・川)、モシン・ノシケ・オマ・ナイ(島の・中央・にある・川 mosirの語尾が続く語のnに引きつられてnに変わった形)とこの川の三本の支流が注いでいた。 {現在の川名は桂川。駅名の茂尻は「もしり」。}	駅名 山田	A	
13 モセウシ 茂世丑 (栗沢町)	地区 川	モセウシ *モセウシ	mose-us-i	イラクサ・群生する・所 ----- 草を刈る・いつもする・所	道内諸地にモセウシの地名が多いが mose には「いらくさ」という意味と「草を刈る」という意味があって、どちらだったか、伝承でもないと分からない。	山田	B	- mose の意味の特定困難。 -
14 モセウシ 妹背牛 (妹背牛町)	町 駅	モセウシ *モセウシ	{ mose-us-i }	イラクサ・ある・所	「イラクサ・群生する」という意味と「草刈り・いつもする」という意味があり、伝承でもないとどちらかわからない。	永田 山田	B	- mose の意味の特定困難。
15 モセカルシナイ (滝上町)	川	モセカラウシナイ *モセカルシナイ	mose-kar-us-nay	イラクサ・を刈る・いつもする・川	ただし、mose-kar は、ただ草を刈る意にも使われたという。草刈り沢だったのかもかもしれない。	山田	B	- mose-kar の意味するところの特定困難。

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				備考	コメント
16 モセカルベツ (羅臼町)	川	モセカラベツ	mose-kar-pet	イラクサ・採る・川	モセは繊維材料とした「おおばいらくさ」であるが、ただ草刈りすることも mose-kar といったらしいので、伝承でもないとどっちだったか分からない。	山田	B	- mose-kar の意味するところの特定困難。
17 モクハツ 茂築別 (初山別村)	川	モチュクベツ	{ mo-cukpet }	小・築別川	羽幌町側の築別川と並流している兄弟のような川。 {築別については別掲。}	山田	A	
18 モツタ 茂津多 (瀬棚町)	岬	モオタ	mo-ota	小さい・砂浜	アイヌ語から来たものらしいが意味の伝承がない。この崖続きの間の所々に小さな浜があるようで、そのどこかがモオタといわれていて、それが訛ったのもあったろうか。	山田	C	-
19 モトネツ 元稲府 (雄武町)	川	モオトイネブ	mo-otoynep	小さい・音稲府川	この川は、永田地名解が「オトイネブ 川尻濁りたる泥川」と書いた音稲府川(o-toyne-p 川尻・泥んこである・もの(川))の南約3キロの所を並流している。永田地名解は「小さき泥川」と書いたが、川尻の辺りで見るとそんな泥んこ川といった感じではなかった。並流する音稲府川より短いので、対称した意味でモ(mo 小さい)と呼んだのであろう。	山田	A	
20 モハジ 茂辺地 (上磯町)	地区	モペチ	mo-peci	静溢川	川下の方は砂浜でせき止められて水が貯まり、川幅が広がり、ほんとうの遅流であるが、街道の橋から上は相当の流れである。	永田 山田	C	- どちらとも特定しがたい。
	川	ムベツ	{ mu-pet }	フサガ 塞る・川				
21 モハツ 藻別 (紋別市)	地区	モベツ	mo-pet	静川 {静かな・川}	川の流れが早くなく、古より疫疾が発生しなかったため。紋別市街から約2キロ東の藻鼈川筋の地名。この川口の辺が遅流なので、その名がついたのであろう。	永田 山田	A	
22 モモナイ 桃内 (小樽市)	地区	ヌムオマナイ *ヌモマナイ	num-oma-nay	果実沢 果実・ある・沢	当地李樹多きことは先輩の日誌に見えたり。西蝦夷日誌でもヌモマナイである。	永田 山田	B	- 古くからヌモマナイであったらしく、アイヌ語起源と思われる。
		-	-	-	あるいは、海岸にある桃形の岩石から名くともいう。			
23 モヨロ 茂寄 (広尾町)	地区	モイオロ *モヨロ	moy-or	入江・の所(内部)	広尾の出岬があるので、その北がゆるい入江の形になっている。その部分がモヨロと呼ばれ、それが茂寄村となり、その辺一帯の称となっていた。	山田	A	

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考		
		カナ表記	ローマ字表記				種別	コメント	
24 モラップ (千歳市)	地区 山岳	モラプ	mo-rap	翼岬{?}	二つ岬があって、沼の中に入り、あたかも両翼を張ったようだったため。 rap には tapkop (たんこぶ山)と同じ意味もあったというが、mo は「小さい」あるいは「静かな」という意。二つの並んだ山を小さい翼と呼んだのであろうか。あるいは入江の浜の両側を翼に見たてたのもあろうか。	永田 山田	C	?	-
				小さい・たんこぶ山	モラップの北側、湖畔市街との間にピション(浜側の)・モラップ、キムン(山側の)・モラップというたんこぶ山が対になって並んでいる。rap には tapkop (たんこぶ山)と同じ意味もあったという。二つの小山の名が mo-rap (小さい・たんこぶ山)だろうか。				
				小さい・坂	rap は ran (下る)の複数形でもあり、ran は坂の意にも使われた。この浜に下る坂を呼んだのかもしれない。要するにこの地名も分からなくなった名なのであった。				
25 モリ森 (森町)	町 駅	オニウシペツ	o-ni-us-pet	{川尻に・} 木・群生する・川	上原氏は「オニウシ。樹木の繁ると訳す。」と書いた。市街の西を流れる鳥崎川がオニウシペツ(o-ni-us-pet)と呼ばれ、それが下略されるか、あるいは pet の代わりに-i を付けるかしてオニウシと呼ばれ、それが訳されて「森」となったのであった。 {森町史は「古くから本町一帯は実によく樹木が繁茂していたと思われる。海岸から見上げる上台方面の緑樹がうっそうとして、あたかも樹林密生の巨大な丘とも見たであろう。」と書いている。}	山田	A		
26 モンシス門静 (厚岸町)	地区 駅	モイスツ	moy-sut	入江・の根もと	厚岸湾北岸のゆるい浜辺が当時モイ(入江)と考えられていて、その端の所なので、こう呼ばれていたのであろう。	山田	A		
27 モンハツ紋別 (紋別市)	市 山岳	モペツ	mopet	藻鱈川 ^{ベツ}	東にある ^{ベツ} 藻鱈川から出たものようである。	山田	A		「藻別」参照。
28 モンハツ紋別 (長万部町)	川	モペツ	mo-pet	静寧川 静かな・川	^{イニシエ} 古より争闘なく、又悪病流行のときもこの村は安静だったため。 松浦氏も「いかなる悪病流行するともこの村へ入らざる故」と書いた。ここではモ(mo)を流れが静かという意味でなく、環境がおだやかだという意味だと伝承されたい。	永田 山田	B		-
29 モンハツ門別 (門別町)	町 川 駅	モペツ	{ mo-pet }	静なる川 {静かな・川}	{松浦『戊午日誌』は「モンベツは遅流の事也。この川口遅流なる故」と書いている。大河であり、河口から中流まではほとんど瀬のようなところもなく、川幅もあって流れの緩やかな川だという。}	上原	A		

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				備考	コメント
30 モンベツ 捫別 (静内町)	川	モベツ	mo-pet	静かな・川	前は土地もその名で呼ばれていたが、道内諸地に同音の地名があるので東静内と改名されている。 {松浦『戊午日誌』は「モウベツ。静かなる川。この川すじ古よりして、合戦また騒動がありしことなし。依って号る也」と書いている。}	山田	B	-
31 モンポナイ 紋穂内 (美深町)	地区 駅	モヌポナイ *モヌポナイ	mo-nup-o-nay	小さい・野・にある・川	明治31年5万分図にはモヌッポナイと書かれている。	山田	C	-

【ヤ】

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				備考	コメント
1 ヤウスベツ 矢臼別 (別海町)	地区	オンネヤウシベツ	onne-ya-us-pet	網曳の大川 {年寄りの(大きい)・網・ついている・川}	北側に並流するポン(小さい)ヤウシベツと対称してオンネ(大きい)をつけた呼び方である。現在ヤウシュベツ川というのは永田地名解が子音シをシュと書いた変なくせが残ったためである。アイヌ語ではウシモウスも同音。地名にはヤウスベツの方で残った。	永田 山田	B	-
2 ヤキシ 焼尻 (羽幌町)	地区 島	エハンケシリ	{ ehanke-sir ? }	近い・島	ヤンケシリ。アイヌ語エハンケシリの略語なるべし。この所テウレ遠くにある。故にこの名有。 ヤンケは「揚げる」という普通の地名用語だが、その意味の伝承は聞かれない。 {エハンケシリは天売と焼尻の2島が並んで位置しており、陸地から見ると天売より焼尻が近いという解釈と思われる。}	蝦夷 山田	C	? -
3 ヤクモ 八雲 (八雲町)	町 駅	-	-	-	昔ユー・ラプ(yu-rap 温泉が・下る)と呼ばれた所であるが、ここに農場を作った徳川慶勝侯が、古歌「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに」にちなみ、明治14年(1881年)に八雲と命名したと伝えられている。	山田	A	和名と思われる。
4 ヤゴシ 矢越 (福島町)	岬	ヤクシイ *ヤクシ	ya-kus-i	内陸を・通る・所	岩岬の所で、その前後の海岸は崖続きなので通行できない。海岸を離れて山越えをして、また向こう側の海岸に出なければならなかったため、こう呼ばれたもの。現在でも、街道、鉄道ともに知内から内陸を上り迂回して福島に出ている。	山田	A	
5 ヤスウシ 安牛 (幌延町)	地区 駅	ヤシウシイ *ヤスシ	yas-us-i	網を引く所 (網で)魚をすくう ・いつもする・所	天塩川の網引き場であったため。	駅名 山田	B	-

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				備考	コメント
6 ヤソケ 安瀬 (厚田村)	地区	ヤソケ	ya-soske	差網場{?}	アイヌが細かな差網で魚を捕ったためという。 ya は「網」だが、soske がよく分からない。ふつう「剥げている」という意に使う語だが、これで「魚を捕る？」意に使ったのであろうか。西蝦夷日誌も「ヤソケ。小き網をここに懸すと云儀なり」と書いた。	永田 山田	C	? -
7 ヤフライ 矢不來 (上磯町)	地区	ヤンケナイ	yanke-nay	陸揚場 {陸に揚げる・川}	この川口の辺に舟を着けて、漁獲物とか積荷を揚げた所なのでこの名がついたのであろう。なお、昔は「やぎない」のように呼んだ場所で、昔の人たちは東北弁で「矢が来(け)ない」という言葉に当てて、矢不來と書いたのだろうが、それでは読みにくいので、後に「やふらい」と音読みにして呼ぶようになったものらしい。	永田 山田	B	-
8 ヤマガル 山軽 (浜頓別町)	地区	ヤムワッカル	yam-wakka-ru	冷たい・水(のある、を汲みに行く?)・道	永田氏は「冷水路。崖より冷水流れいづ。」と書いている。 {松浦『西蝦夷日誌』には「サルフツよりこの所まで水一滴もなきに、始めて水を見る。小休所。樽にて水を運ぶ。」と書いてあるという。}	山田	B	-
9 ヤマコシ 山越 (八雲町)	地区 駅	ヤムクシナイ	yam-kus-nay	栗殻沢{?}	-	永田	C	? -
		ヤムウシナイ *ヤムシナイ	{yam-us-nay}	栗(を拾うために)・通行する・川	-			? -
		ヤムウクウシナイ *ヤムクシナイ	{yam-uk-us-nay}	栗・多{い}・沢	意味はそのとおりだが、昔からの音ヤムクシナイに合わない。	松浦 山田	? -	
10 ヤマハ 山部 (富良野市)	地区 川 駅	ヤムペ	{yam-pe}	冷たい・水	古名をヤマエといったともいうが意味は不明である。むしろヤムペが訛ったものでないかと思われる。	山田	C	? -
		ヤムアエ *ヤマエ	yam-a-e	栗を・我ら・食べる	松浦図では「ヤマエ」で、明治29年5万分図では「ヤマエ」である。似た地名では沙流川中流にヤムエがあり、永田地名解はyam-eと訳した。もしかしたらこれと同じ、あるいはyam-a-e ぐらいの名だったかもしれない。			? -
		ヤムペツ	{yam-pet}	冷やかなる・川	開拓当時より同所に栗のあったことを聞かぬ。古老に聞くも全然栗を見たことがないという。同所は山部川をはじめ芦別岳の雪溪に源を発する非常に冷たき流れである。	富良野 地方史	? -	
11 ヤムワッカナイ 止若内 (陸別町)	地区	ヤムワッカナイ	yam-wakka-nay	冷たい・水の・川	-	山田	B	-

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				備考	コメント
12 ヤンペツ 止別 (小清水町)	地区 川	ヤムペツ	yam-pet	冷川	川の近傍にメム(泉池)があって、冷泉が湧出していたため。	永田	C	? -
				冷たい川	-	駅名		
	駅	ヤワアンペツ	ya-wa-an-pet	内地の方・に・ある・川	従来の「冷たい川」説には賛成できない。アイヌ語ではヤムワッカ(冷い・水)とはいうが、ヤムペツ(冷い・川)といわない。もとの形はヤワンペツで廻浦日記でもそのように出ている。斜里より手前(注:網走の方から見て)にある川なのでそう名づけたのであろう。	知里		

【コ】

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				備考	コメント
1 ウ列 勇足 (本別町)	地区 駅	エサンピタラ	e-san-pitar	差出 ^{かわら} 積 頭が・前(浜の方)に出ている ・川原	川中に斗出したる積。 勇足の字を当ててエサンピタラと呼んだのであるが、他地の人には読めないの、音読みをして「ゆうたり」というようになった。明治29年図を見ると、勇足市街から2キロ余下流で利別川が大きく曲がっていて、その突出部にイサンピタラと書いてある。そこがこの地名の発生地なのであった。	永田 山田	B	-
2 ウチ 勇知 (稚内市)	地区 川 駅	イオツイ *イオチ	i-ot-i i-oci	それ・多くいる・所	永田地名解では「へび多き所」と書かれた。へびというのをはばかって「それ」といったのであろう。	山田	B	-
3 ウドウ 湧洞 (豊頃町)	地区 川 沼	ユト	yu-to	温泉・沼	この沼に温泉があったため。 時々ぬるい水が出たのであろうか。	上原 山田	B	-
4 ウバリ 夕張 (夕張市)	市 川 駅	ユパロ	yu-paro	温泉・の口 鉱水・の川口	流域に目ぼしい温泉場はないが、小さい鉱泉はあるという。ユは温泉と訳されてきたが、熱い湯とは限らず鉱水のこともいった。昔千歳川(江別川)に注いでいた当時の川口に、下流の鉱泉水が流れていたため、ユー・パロと呼ばれ、それがひいて全川の称となり、夕張の名になったと考えられないこともなさそうである。	松浦 永田 山田	C	- どちらとも特定しがたい。
	山岳	イバラ	{ i-par }	そのの・口	この川が、往時の文化的中心であったシコツ(千歳地方)に往来する口であったのに基くものであろう。	駅名		

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				確定性	コメント
5 ユウフツ 勇払 (苫小牧市)	地区 川 駅	ユプトゥ	yu-putu	温泉川口 {温泉・の川口}	川上に温泉があり、ユペツプトゥ(yu-pet-putu 温泉・川・口)というべきが略された。	永田		?
		ユプツ	{ yu-put }	温泉(川)・の口	幕末から明治にかけて「ユウフツ」と呼ばれるようになった。秦氏は「源の湖の水がぬるいから、また、この川の支流の所々に温泉があるため。」と書いたが、現在然るべき温泉が見えないのに、どうしてそう呼ばれたかは分からない。	山田	C	?
		イプツ	i-put	それ・の口	古老たちに聞いて見たら、はっきりこのように聞こえ、古い文献の「いふつ」または「いづつ」の音にも合うが、イ(それ)が何を指しているのか分からなくなっている。			-
		イプトゥ	i-putu	それ・のその口				
6 ユウハツ 湧別 (湧別町)	町 川	ユペツ	{ yu-pet }	温泉の川	この川内に温泉があるため。 {秦、松浦両氏も同説をとっており、湧別川流域には現在、瀬戸瀬、武利、白滝に温泉がある。}	上原		- 諸説あり特定しがたい。
		ユペ	yupe	鮫 {チョウザメ}	-	永田	C	?
		イペオツイ *イペオチ	{ ipe-ot-i } { ipe-oci }	魚・豊富である・所	{湧別町史は「この川にチョウザメがいたという話はない」とし、同説を採っている。}	駅名		-
7 ユウラップ 遊楽部 (八雲町)	川 山岳	ユラフ	yu-rap	温泉が・下る	{秦檜麻呂は「この辺温泉の気ありて、水流皆温かなるより...」と書いている。}	山田	B	-
8 ユニ 由仁 (由仁町)	町 川 駅	ユウニ	yu-uni	温泉ある所	由仁川西支流にはどれにも温泉が湧いていたのだという。	永田 山田	C	- どちらとも特定しがたい。
		イウンイ *イウニ	{ i-un-i }	へび・いる・所	-	駅名		
9 ユハツ 湯別 (寿都町)	地区 温泉	ユペツ	yu-pet	温泉・川	湯別温泉があり、湯の沢川が流れている。アイヌ時代は、それがユペツと呼ばれ、それが湯別となったのであろう。	山田	A	

【ヨ】

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				磯バ	コメント
1 ヨ 仔 余 市 (余市町)	町 川 駅 山岳	ユオイ	yu-ot-i	温泉の有る所	この川上に温泉があったため。	上原 山田	C	- どちらとも特定しがたい。
		*ユオチ	yu-oci	温泉・いっぱいある・所				
		イオイ	i-ot-i	ヘビ多く居る所	恐ろしいもの、貴重なものは直接にその名を呼ばず、はばかって「それ」ということが多かった。 {まさに「ヘビ」の密度高く生息している地域だという。}	永田 山田		
		*イオチ	i-oci	それ・多くいる・所				
2 ヨロウシ 養老牛 (中標津町)	地区 温泉	イウオロウシ *イウォルシ	iwor-us-i	狩猟地・にある・川	いろいろな形が考えられるが、たぶん最後の形で、虹別の辺のコタンの人たちがおひょうニレとか、イラクサとかの皮を、繊維を採るために、温泉につけてうかした場所だったのでこの名で呼ばれたのではなからうか。(水につけるはウオロ、ホロ、オロ、woro、horo、oro等の形で残っている。) {この付近のケネカ川等からアツシが産物として相当出ているという。}	山田	B	- - i-oro-us-i 解が自然な形と思われる。
		エオロウシ *エオルシ	e-or-us-i	頭が・水に・ついている・もの(山の出先が水辺に突き出ている所)				
		イオロウシ *イオロウシ	i-oro-us-i	それを・水につける ・いつもする・所				
3 ヨト 呼 人 (網走市)	地区 駅	イオピト	i-opi-to	それを・捨て去った・沼	yopi-to 親沼から分かれ出ている湖。もと i-opi-to 。そこから別れて行った沼の義である。 網走湖東岸の北端部から、湖の北東が細長く入り込んでいて、湖本体との間はひよる長い出岬の形になっている。その長い入り込んだ湖の部分が元来のヨピトである。	知里 山田	B	-

【ラ】

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				磯バ	コメント
1 ライ 来 馬 (登別市)	地区 川 山岳	ライパ	{ ray-pa }	(流れが)死んでいる・川口	川の辺が遅流になり、淀 ^{ヨド} んでいるような姿をいったもの。現在は名のもとになった川口の辺は中央町、新川町となり、来馬は上流の町名になった。 {現在も流れの遅い川だという。}	山田	A	
2 ラ ウ 白 羅 白 (羅臼町)	町 川 山岳 峠	ラウシ	ra-us-i	腸の生ず	この川の源は沼なので、鱒鮭が沢山産卵して、魚の腸が川一面になったため。	上原	C	- いずれとも特定しがたい。
		*ラウシ		ソウラ 臓腑骨等有し	昔、鹿熊等を捕り、必ずここにて屠 ^{ホフ} ったため。			
					低所 低い所・にある・もの(川)	ラ(ra)には低い所と、臓腑の二つの意味があるが、道内類形地名から見ると、元来は永田解の低所川だったのでなからうか。		

現在の地名 (所在地)	区分	アイヌ語地名		アイヌ語の意味	解釈及び由来	出典	備考	
		カナ表記	ローマ字表記				確定	コメント
3 ラッコ 楽古 (広尾町)	地区 川 山岳	ラッコ	rakko	ラッコ	昔、ここへラッコが流れよったため。 ここまでラッコが南下したかは問題である。珍しい海獣が 流れついたので、これが話に聞くラッコだろうと、こ の名になったのかも知れない。	松浦 山田	B	-
4 ラルシ 良瑠石 (北檜山町)	川	ラウシイ *ラルシ	rar-us-i	泳所 泳ぐ・いつもする・所	昔、アイヌがこの海で泳いで、鮑等を採ったため。	永田 山田	B	-
5 ラワン 螺湾 (足寄町)	地区 川	ラニ	rani	坂	ラニまたランと云う。ラワンにはあらず。	永田 山田	C	-
		ラウアン *ラワン	{ raw-an }	{底所(深み)・ある}	古い松浦図でもこの川はラワンであった。この言葉を知ら ないが、地名によく出るラム、ラウネ、ラウシ(共に低いの 意)等から考えると、ラワン(ラウ・アン?)も同様に低いの 意で使われたのではあるまいかと考えて来た。ラワンペッ ぐらいの略か?			
6 ランコ 蘭越 (千歳市)	地区	ランコウシイ *ランコウシ	ranko-us-i	カツラ・群生する・所	桂は良材としてずいぶん伐られたというが、この辺は今 でも桂の木が点在している。 {昔はカツラがたくさんあったという。}	山田	A	
7 ランコ 蘭越 (蘭越町)	町 駅	ランコウシイ *ランコウシ	ranko-us-i	カツラ・群生する・所	-	山田	B	-
8 ランシマ 蘭島 (小樽市)	地区 駅	ランオシマナイ *ラノシマナイ	ran-osma-nay	下り入る所 下り・入った・沢	昔、虻田アイヌが山を越えてここに下り入り、その子孫が 南北に住み着いたという。 松浦氏の記録にはララシュマナイ、ラゴシュマナイとあ るが、他に例がなく解しにくい。永田説は当時のアイヌ古 老の説らしい。	永田 山田	C	-
		ランオシマクナイ *ラノシマクナイ	{ ran-osmak-nay }	下り坂・のうしろの・川	-			
9 ランポク 蘭法華 (登別市)	岬	ランポクケ	ran-pok-ke	坂・の下・の所	登別川の川下からすぐ西側の丘陵の富浦側は崖のよう な斜面で、そこに電光形の急坂がついて、幕末の記録で は難所とされていた(今でも鉄道のトンネルのすぐ山側に その道が残っている)。それでそこをランポクケあるいは省 いてランポクと呼ばれていた。	山田	A	
10 ランル 蘭留 (比布町)	地区 川 駅 山岳	ランル	ran-ru	下る・道	天塩{の国}からの峠道が下って来る所なのでこの名が ついたのであろう。	山田	A	

【リ】

	現在の地名 (所在地)	区 分	ア イ ヌ 語 地 名		ア イ ヌ 語 の 意 味	解 釈 及 び 由 来	出 典	備 考	
			カ ナ 表 記	ロ ー マ 字 表 記				確 定 値	コ メ ン ト
1	リキビル 力 昼 (苫前町)	地区	リキピリ	ri-kipir	高山平(注:平は崖のこと) 高い・崖	力昼市街の南の海岸に突き出している山崖の名であっ たらう。	松 浦 山 田	B	-
2	ルクシベツ 陸志別 (羅臼町)	川	ルクシベツ	ru-kus-pet	山越 道・通る・川	昔、斜里郡へ山越した路である。 この川は上流に鉱床があるのか、川石が真っ赤である ので間違えることがない。	永 田 山 田	A	
3	リクハツ 陸 別 (陸別町)	町 川 駅	リクンペツ	ri-kun-pet	高危川 {?}	永田氏は時々、クンという音に「危い」という解をつけて いるが、そんな語意が果たしてあったのであろうか？ 太平洋側とオホーツク海側の分水線である高い山並み の間を東西に流れている川である。さかのぼって行くと網 走との境の高い山列の中に入っている。 {陸別町史は「(この)意識が地形の実感に近い。」と書い ている。}	永 田 山 田	B	? - - 山田解の方が自然な形と思 われる。
			リクウンペツ *リクンペツ	rik-un-pet	高い所・にある(に入っている) ・川				
4	リシリ 利 尻 (利尻町)	町 山岳 島	リシリ	ri-sir	高い・島	古くはリシイリのようにも書かれた。富士山が海中に浮 かんでいるような姿の円い島で、その利尻山は 1719 メー トルの高さである。	山 田	A	
5	リシリフジ 利尻富士 (利尻富士町)	町	-	-	-	利尻島の東側に位置していたため東利尻町と呼んでい たが、平成2年、名峰「利尻富士」にちなんで、利尻富士 町に改称されている。	利尻富士町 H P	A	「利尻」参照。
6	リピラ (門別町)	川	リピラ	ri-pira	高い・崖	こう聞こえる。なお、他地のリピラを見に行き、特別の 高崖とも思わなかったことがある。土地の人が川崖か何 かの高い方と呼んだ名か。	山 田	C	-
7	リヤウシ (網走市)	湖	リヤウシト	riya-us-to	越冬する・いつもする・湖	そこにいつも越冬するリヤウシ・コタン(越年・村)があり、 そこにある湖なのでリヤウシト(湖)と呼ばれた。	山 田	B	-
8	リヤムナイ 梨野舞納 (共和町)	地区	リヤムナイ	riyam-nay	越年川 {?}	秋から来春に至るまで越年して鮭を漁ることができた ため。 リヤ(riya)は越年する、越冬する意であるが、riyam と もいうかを知らない。何か後に語があったのかもしれない。	永 田 山 田	C	? -